

# 商学部

## 教授 太田 和博

今から半世紀以上前の家内の話から始めることをお許しいただきたい。家内は幼稚園の頃からバレエを習っており、お世話になった先輩バレリーナの舞台にしばしば招待されていた。そのひとつは、1968年10月26日の日生劇場でのミランダであった。牧阿佐美が主役のミランダを踊った。

舞台終了後、楽屋に父とともに招待してくれた先輩を訪ねる。そして、父は目を疑った。ミランダの原作者である三島由紀夫と9日前にノーベル文学賞の受賞が決まった川端康成が談笑していたのである。それから4年を経ることもなく、二人はそれぞれに自死した。

三島に対する評価は振幅が大きいし、好き嫌いも激しく対立する。私も好きなわけではないが、一文一文が短く、リズムカルな文体からは音が聞こえてくる感覚がある。耽美派としての代表作として『金閣寺』は珠玉であろう。

今回紹介した『命売ります』は最近注目されており、若い読者も増えているようだ。それは、ハードボイルド小説とも言え、エンターテインメントとしても楽しめるからである。週刊『プレイボーイ』誌に連載されたことから、若者への親和性は高い。

それとともに、純文学作品では書けない三島の本音、それは生と死に関する苦悩がにじみ出ているという指摘も当たっていると思う。村上春樹の『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』と同じ読後感があるかもしれない。



『命売ります』(ちくま文庫)  
三島由紀夫  
(1998,筑摩書房)

### 【所蔵情報】

生田分館 本館展示中	資料ID	700459746
	請求記号	X/080/C44/Mis
神田分館 Knowledge Base 展示中	資料ID	701716961
	請求記号	J/913.6/Mi53/